

## 令和 5 年度 地域ごとのヤクシカ捕獲頭数【モニタリング ID10 関連】

### 1. モニタリング計画での位置づけ

- (1) 管理目標： II 植生の垂直分布に代表される貴重な生態系が維持されていること。
- (2) 評価項目： D 生態系が維持されていること。
- (3) モニタリング項目： ヤクシカの動態把握及び被害状況把握
- (4) 評価指標： ID10 地域ごとのヤクシカの捕獲頭数
- (5) 評価基準： 捕獲頭数が適正な生息密度維持のために、寄与していること。

### 2. 調査方法

令和 4 年度の捕獲状況について、屋久島町産業振興課、鹿児島県自然保護課、屋久島森林管理署及び屋久島森林生態系保全センターより情報提供いただき、また、環境省の事業捕獲結果を加えて、可能な限り場所を特定できるデータを抽出して整理した。更に過年度の状況と比較を行った。

### 3. 調査結果

#### (1) 令和 5 年度捕獲状況

捕獲実施場所は、過年度と同様に島の周縁部が主であり、中標高帯以上での捕獲はほとんど実施されていない。

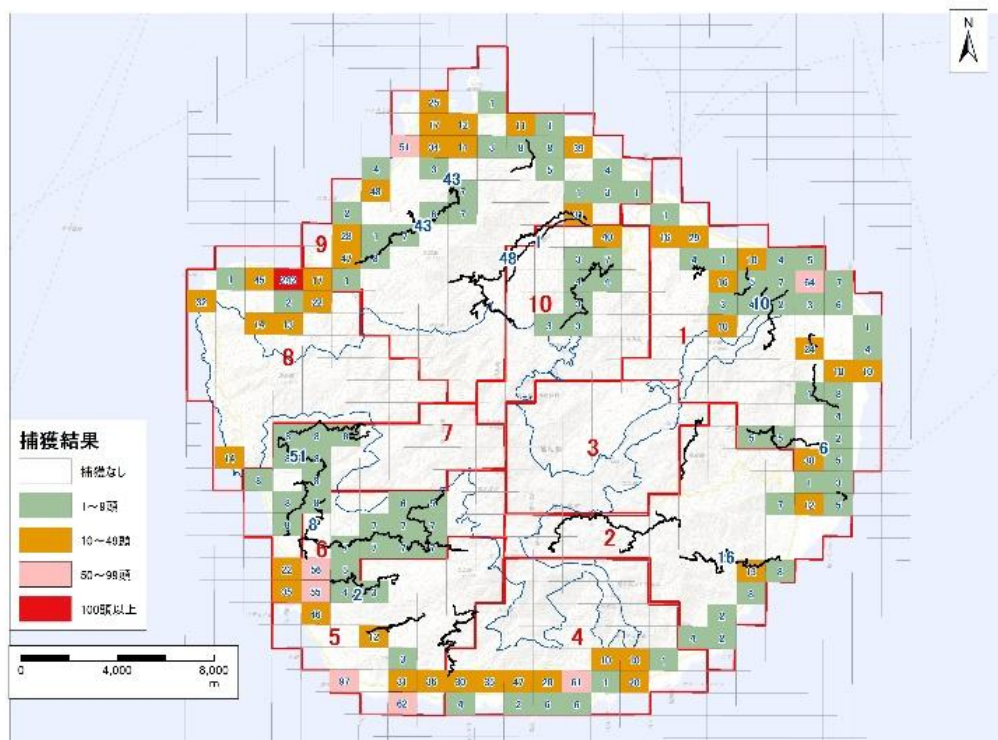


図 1. 令和 5 年度捕獲頭数

○各年度の捕獲状況

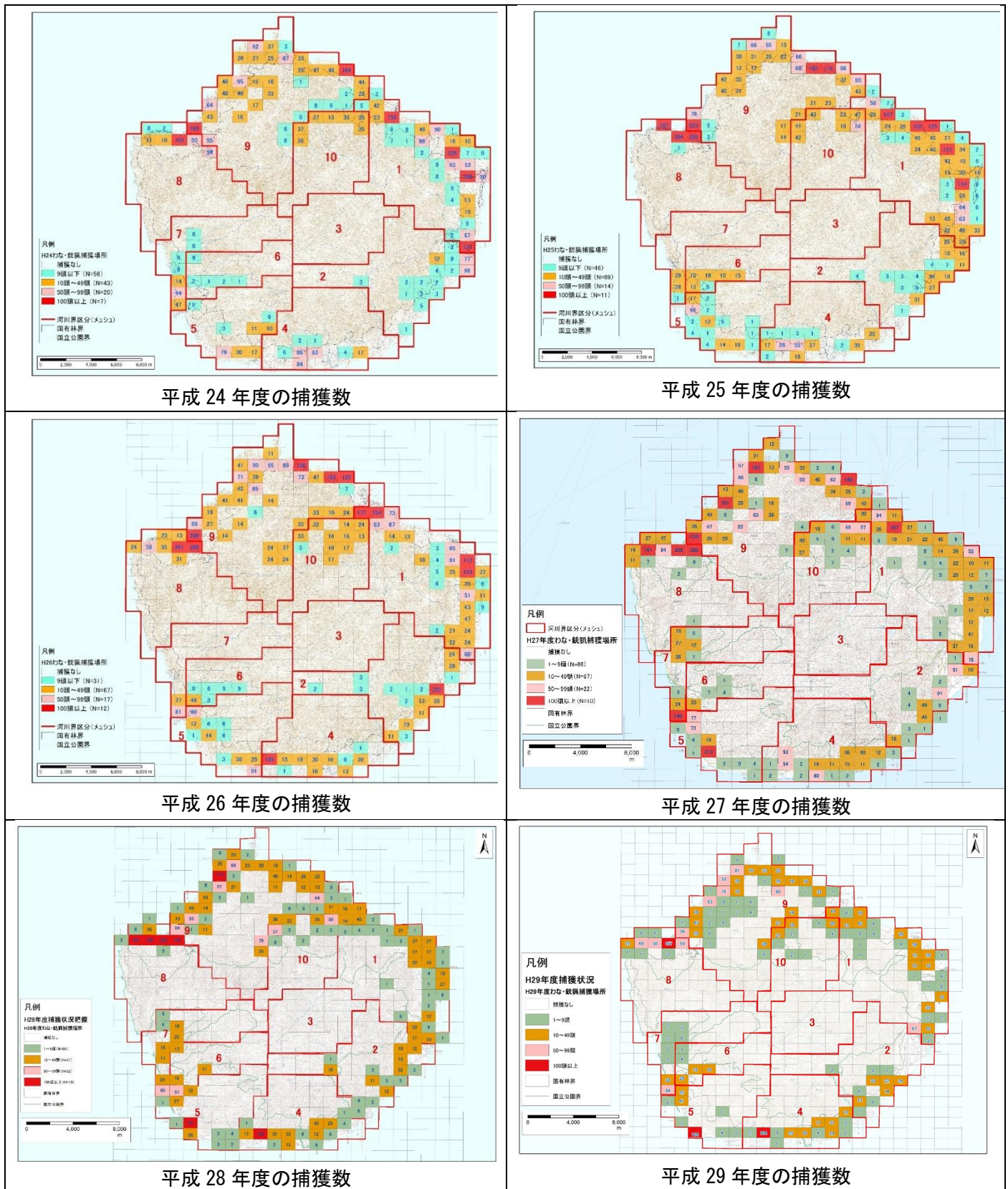
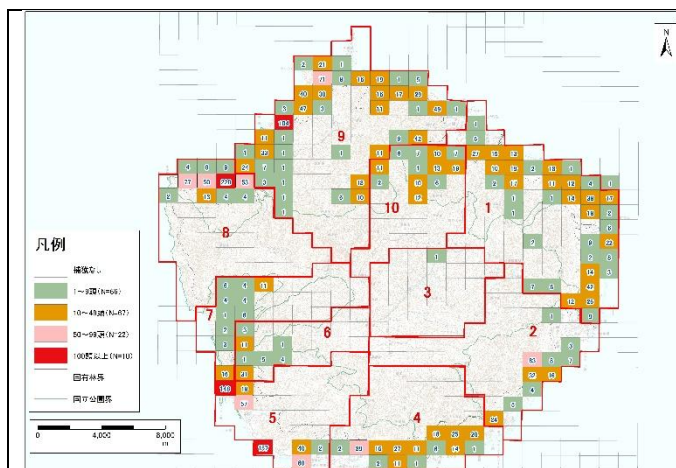
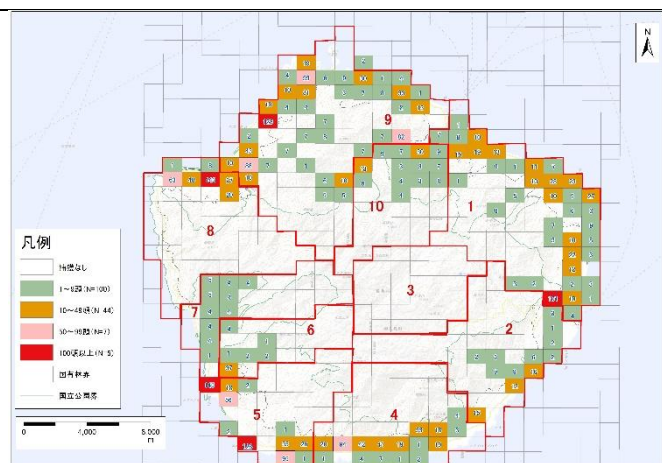


図 1 平成 24 年度から令和 5 年度までの捕獲数の経年変化 (1/2)

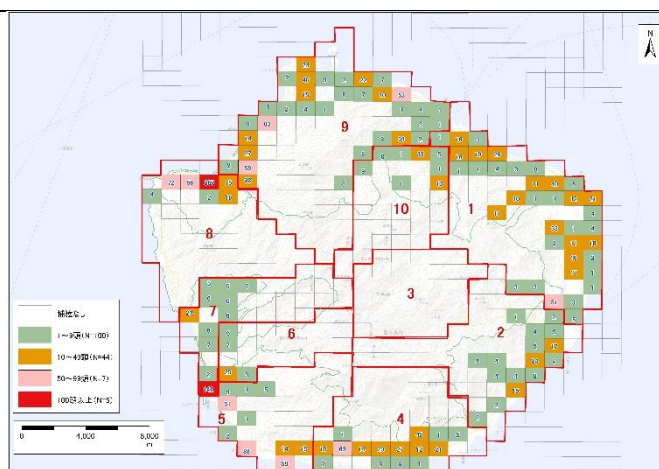




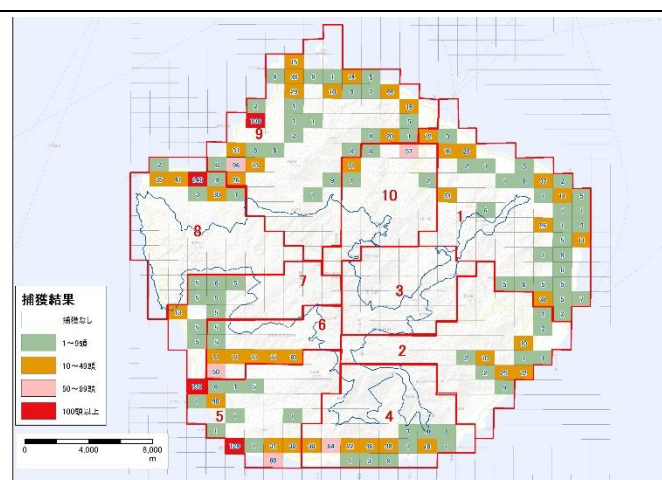
平成 30 年度の捕獲数



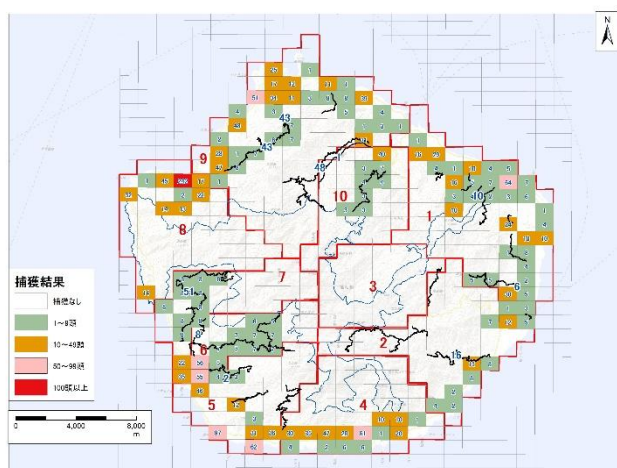
令和元年度の捕獲数



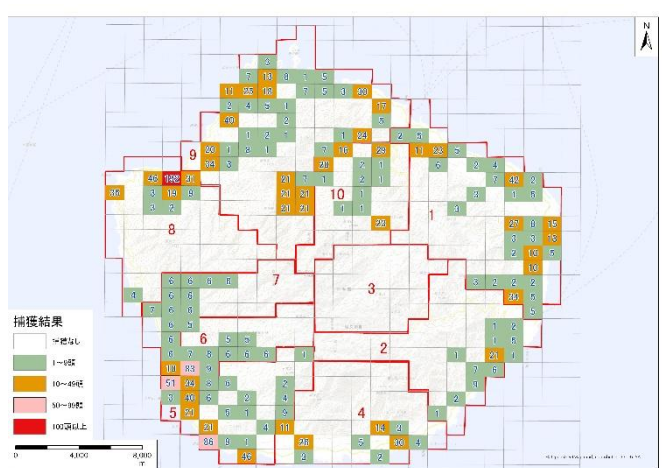
令和 2 年度の捕獲数



令和 3 年度の捕獲数



令和 4 年度の捕獲数



令和 5 年度の捕獲数

図 2 平成 24 年度から令和 5 年度までの捕獲数の経年変化 (2/2)

使用したデータは、屋久島町農林水産課、屋久島森林管理署、屋久島森林生態系保全センターに問い合わせ、可能な限り場所を特定できるデータを抽出した。場所を特定できない林道のデータ場合は該当するメッシュに按分して整理した。

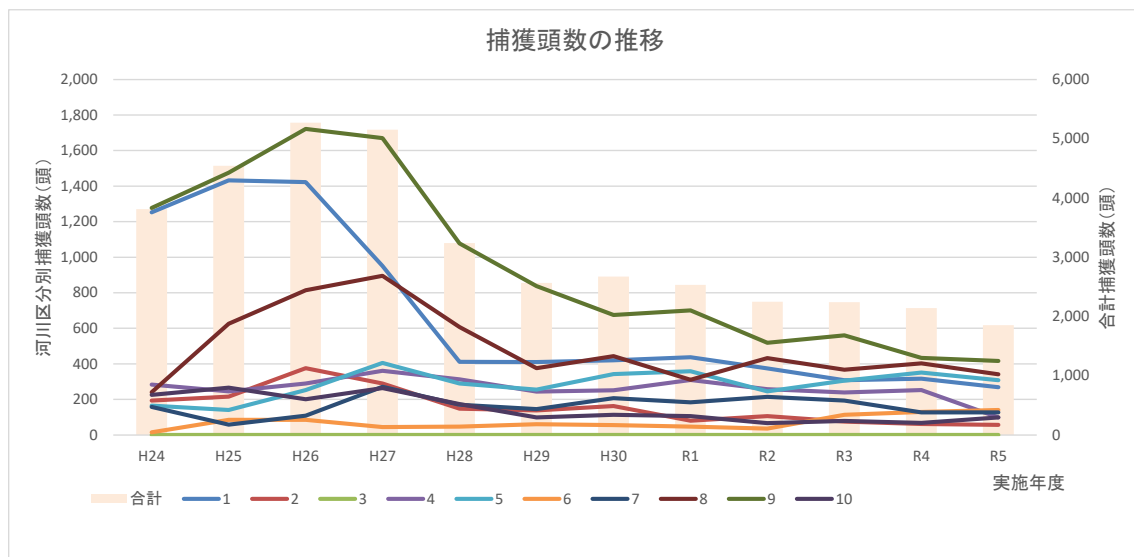


図 3 河川区分ごと及び屋久島全体の捕獲頭数

捕獲は主に屋久島辺縁部の低標高地域を中心に実施され、合計捕獲頭数は平成 26 年度を最大として減少した。合計捕獲頭数は平成 29 年度以降 2,500 頭から 2,000 頭の間で捕獲頭数が推移している。

## ○捕獲圧の影響

糞塊密度調査を開始した平成 26 年度から令和 5 年度までの累積捕獲数と糞塊密度（平成 26 年度および令和 6 年度）を比較すると（図 4）、西部地域以外の屋久島辺縁部の低標高地域では継続的に捕獲が実施され、相対的に低い値まで糞塊密度が減少した。また、捕獲が実施されていない屋久島中心部の高標高地域や西部地域においても糞塊密度は減少し、屋久島全体で捕獲の効果が及んでいると考えられる。

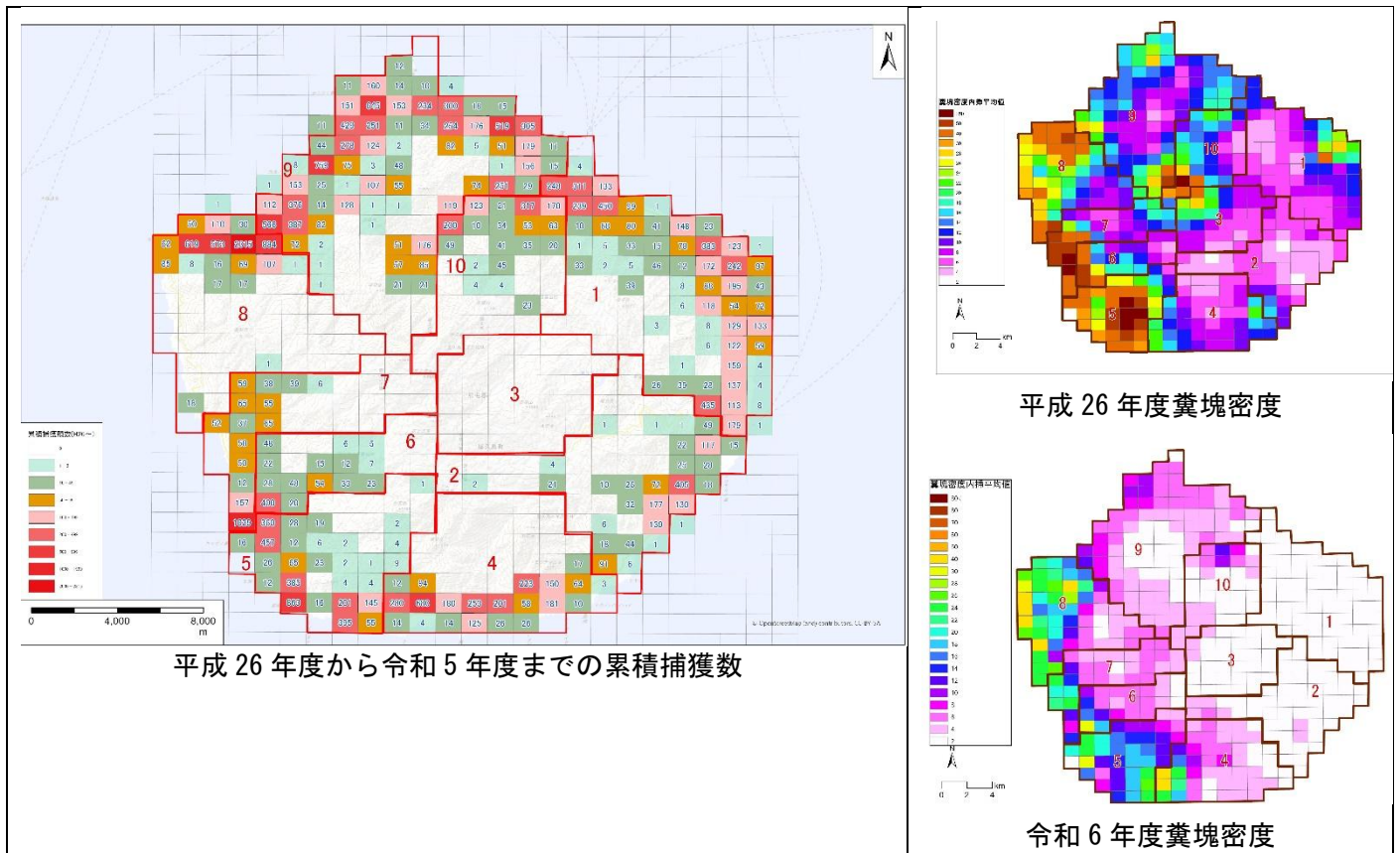


図 4 累積捕獲頭数と糞塊密度の比較

## ○各河川界区分における捕獲圧の影響

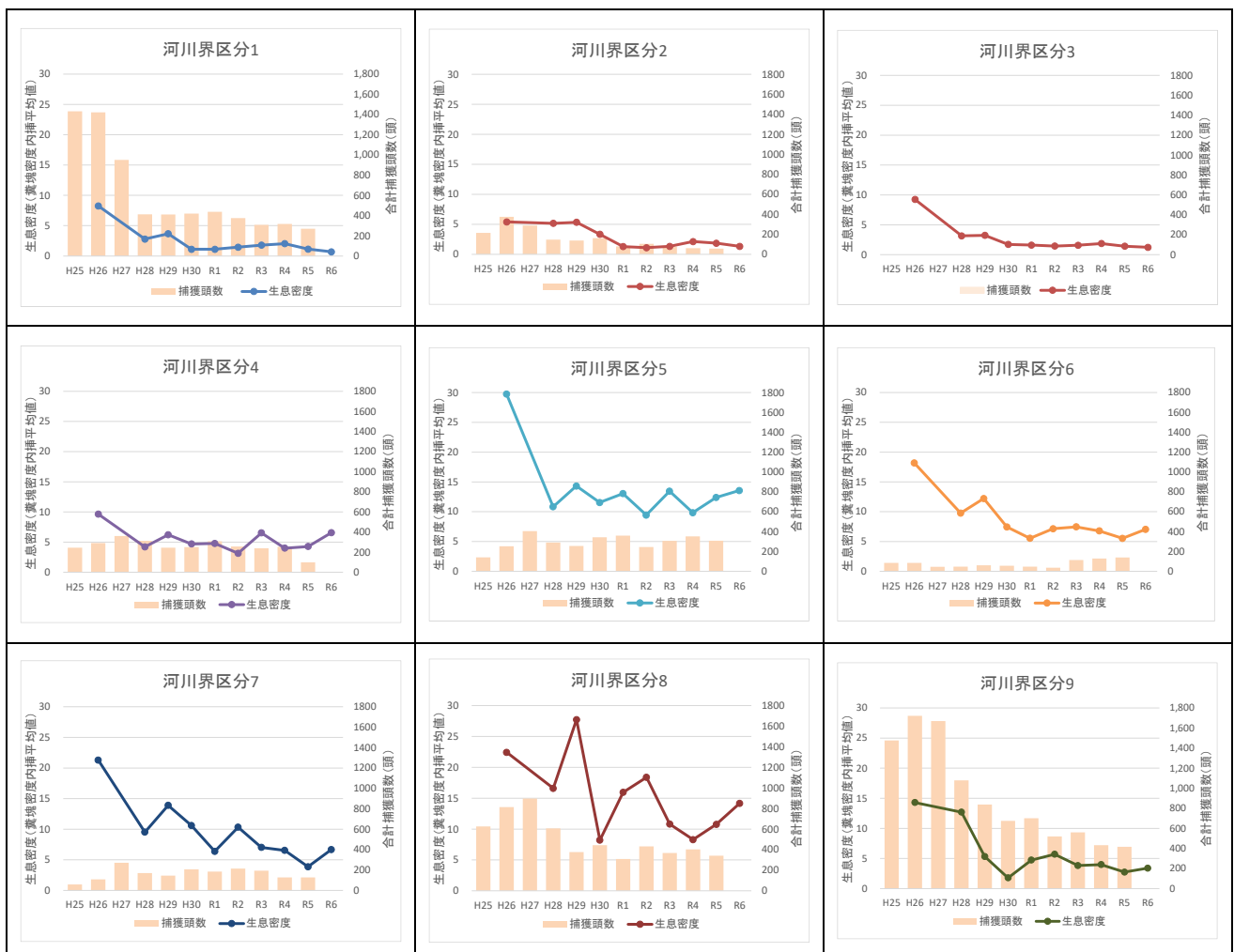
ヤクシカの捕獲効果を検証するため、各河川界区分における捕獲頭数と糞塊法による生息密度の変化を比較した。河川界区分ごとの生息密度は、糞塊密度調査結果の内挿値の結果から各河川界区分内の平均値を算出し、グラフにまとめた（図 5）。

捕獲頭数は平成 25 年から平成 27 年にかけて最大になり、令和 3 年度まで減少傾向が続いている。

糞塊密度は河川界区分によっては一時増加がみられたものの、平成 26 年度以降は減少傾向が続いている。糞塊密度と捕獲頭数の相関性から捕獲圧を継続的に与えたことが糞塊密度の減少につながったと考えられる。

また、捕獲が行われていない河川界区分 3 においても糞塊密度の減少が見られたことから、捕獲は捕獲地周辺にも糞塊密度減少の効果を示していると考えられる。

河川界区分 5 および 8 の糞塊密度は減少傾向にあるが、他の河川界区分に対し高止まりしている。河川区分 4 は令和 5 年度の捕獲頭数が減少し、翌年の令和 6 年度は糞塊密度が増加した。捕獲圧の低下に対する糞塊密度の変化を注視する必要がある。



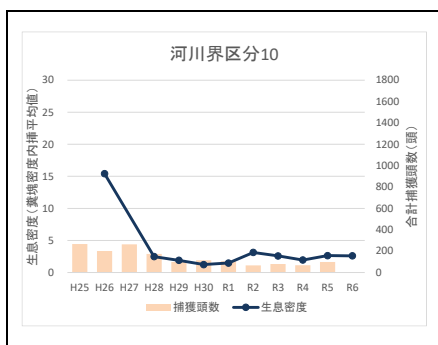


図 5 河川界区分ごとの生息密度（糞塊密度）と捕獲頭数